

心理療法の対人関係に関する研究

須 賀 藤 隆

I. 問 題

心理療法やカウンセリングにおいて、クライアントの人格の変化、あるいは人格適応過程は、セラピスト（又はカウンセラー）との治療的人間関係の確立と展開を通じて、効果的に行なわれることは、周知のことであろう。ところが従来の研究の多くは、セラピスト側の、あるいは、クライアント側の、治療的要因といった、どちらか一方の側にとにかく目を向けがちであった。こうしたクライアントの側から、あるいはセラピストの側から、一方的に治療的要因についてみていくことも重要かもしれないが、私は心理療法中のセラピスト・クライアント間の相互作用を検討していくことが、治療過程の研究にとって最も重要であると考えた。こうした心理療法におけるセラピスト・クライアント関係についての従来の研究では、まず第一に“心理療法的態度による面接”，いわゆる“関与しながらの観察”によるものがある。この方法には多くの長所もあるが、観察と操作のための道具になるのはセラピスト自身であり、この方法の運用は個人の手練にかかると言え、方法という点からは科学的、客観的とは言にくいと考えられる。次に、こうした立場とはちがって、セラピスト・クライアント関係を、第三者の立場から行動的側面の観察にもとづいて、客観的にとらえようとする方法がある。それは、面接中のセラピストとクライアントとを同時に観察していく方法であって、方法としては自然科学的客観性の基盤の上で立っていると見えよう。こうしたアプローチの一つとして、面接状況に生理学的記録を導入するものがある。これは最近ようやく緒についたばかりで、研究業績も多くはないが、面接における対人関係の研究に新しい方法を持ち込んだものとして注目される。こうしたものとしては、1955年の Di Mscio, et al. のものをはじめとして、主なものでは Coleman, et al., 木戸 et al., Malmö, et al. の研究があり、これらの研究に共通する点は、心理療法的面接中のセラピスト、クライアント双方の間の生理学的検証と、臨床心理学的評価という二つの分野の interdisciplinary な総合的研究という点であろう。

つまり、面接状況を行動の側面から臨床心理学的に評価し、それを生理学的記録結果（セラピスト・クライアント間の生理学的同調現象）に結びつけているのである。ところで、こうした諸研究では、臨床心理学的観察、評価も各研究者の観点のおきかたで異っているし、それに関連して、生理学的記録の解釈の仕方も異っており、現状では未だ trial and error の段階にあるというべきかもしれない。このように生理学的 indicator に示されるものは、面接状況のどのような側面を反映しているのかという問題については、大いに議論の余地のある所であるが、R. Spiegel のコミュニケーション理論や、H. B. Kaplan, S. W. Bloom らの指摘によれば、生理学的 indicator の示すものはセラピスト・クライアント間の Empathy の反映ではないかということになり、私も生理学的同調現象は、治療的变化を知るのに有効な測度ではないかと考えているが、しかし、Empathy についての適切な臨床心理学的評価法は今のところ見あたらない。従来から生理学的indicator (ex. プレティスモグラフとかG. S. R.) は、少なくとも被験者の感情とか情緒の状態を鋭敏に示すことは良く知られており、こうした観点に立って、まず第一段階として、生理学的同調現象を、Bales の Interaction Process Categories によってとらえられたセラピスト・クライアント間のコミュニケーションの positive あるいは negative な Affective level との関係から検討し、その上で Empathy との関係についても検討したいと考えた。

II. 方 法

- 被面接者；本学部3年生7名
- 面接者；大学院生2名、助手1名
- 面接期間；1クール4回（各回30分）
- 面接法；client-centered method,]
- 生理学的 indicator ；プレティスモグラフ
- 臨床心理学的評価；Bales の I. P. C. その他

III. 結果と考察

面接中のセラピスト、クライアント夫々の生理学的デ

ータと、セラピスト、クライアント間のコミュニケーション (verbal, non-verbal な相互作用, 応対の推移) を全面接にわたって一対一に対応づけることは、記録機器の関係から困難であるので、以下面接一回毎の生理学的記録と臨床的評価の対応を global にみていくことにする。本研究では、予備実験の結果や従来の諸研究結果から、プレティスモグラフの基線動揺が、セラピスト・クライアント間に3秒以内に相接して出現する場合 (これは“同時性出現”と呼ばれる) に特に注目したい。従来の研究では、こうした例えば同時性出現というような生理学的関係は、セラピスト・クライアント間の情動的応対、または Empathy の指標としてみる事ができるのではないかと示唆されているものである。

ところで、結果は種々の観点から整理できるが、この小論では、面接中のセラピスト・クライアント間の生理学的関係と、I. P. C. による評価との関連性と、同じく生理学的関係と、主に Empathy についてのセラピストの内観報告との関係という2点にしばって述べてみたい。まずはじめに、面接中のセラピスト・クライアント間の生理学的関係と I. P. C. による評価との関係について述べる。すべての事例についての、面接中のセラピスト・クライアント間のプレティスモグラフ基線動揺の同時性出現数の平均は毎分1.49回であり、これより出現数の多く認められる面接を上位群、逆に少ない面接を下位群とし、この上位群、下位群と I. P. C. の Affective level との関係を見たのが表1である。これによると、上位群の面接は、下位群の面接に比べ、positive な Affective level がセラピスト、クライアント共に高く、また negative な Affective level は両者共に低いことがわかった。つまり、セラピスト・クライアント間で同時性出現の多く認められる positive な生理学的関係といわれる場合には、コミュニケーションにおける Affective level の上でも、positive なものがセラピスト、クライアント双方とも多くみられ、逆に同時性出現の少ない negative な生理学的関係の場合には、Affective level の上でも negative なものが、セラピスト・クライアントともに多くなることを示していると考えられる。

ただし、I. P. C. との関係からだけではセラピスト・クライアント間の生理学的関係が面接中の Empathy を反映したものとは直ちに断定できない。そこで、各回の面接終了後、セラピストから、最も共感的理解のできたと感じられた面接から、そうでない面接へと各ケースごとの4回の面接を順位づけてもらい、それと、同時性出現との相関を求めてみた。これによると、双方の相関は $r = +0.44$ ($Pr > 0.02$) となり、面接中の共感的理

解についてのセラピストの印象、内観というものと、同時性出現数の多少とはある程度関係をもっていることがわかった。

その他、セラピストあるいはクライアントの一方にのみ基線動揺が多数出現し、他の者にそれが少ない面接 (ズレの大きい面接) は、好ましい形の面接状況になっていない事等も判明した。

以上のように、本研究では、面接中のセラピスト・クライアント間の生理学的同調現象は、両者のコミュニケーションにおける Affective level に関係していることが示され、また同時にそれは、面接中の共感的理解についてのセラピストの内観報告とも関係のあることが示された訳であるが、第一に問題とされる点は、セラピスト・クライアント間の生理学的関係が、両者の情動的応対を反映したものとは言えても、Empathy あるいは Empathic understanding を反映したものかどうか、未だ明確になっていない点であろう。つまり、I. P. C. の Affective level でとらえたものと、Empathy との関係は不明であるし、また Empathy についてのセラピストの内観報告も、construct validity の面からは難点があるのであって、今後はセラピスト、あるいはクライアントの、内観を更に客観的に測定することを考ねばならない。その為には、Fiedler らの面接状況の研究にみられるように、Q分類の方法を用いて、面接についての印象を、セラピストあるいはクライアント自身によって評定していくといった方法をとることも考ねばならないし、また分析方法についても、マクロ的なものではなく、今後はセラピスト・クライアント間の生理学的現象と、verbal あるいは non-verbal な communication とを、一対一に対応づけていくミクロ的分析方法を用いていけば、セラピスト・クライアント間の生理学的同調現象等の意味するものが、治療にとって、いかなる意味をもつのか、より明確にしていくことができるのではないかと考えられる。

表1 同時性出現数による上・下位群間の Affective levelのちがい (%)

		同時性出現数	
Affective level		上位群 <N=11>	下位群 <N=17>
セラピスト	Positive	38.1* (77)	28.2 (28)
	Negative	7.7* (22)	16.0 (58)
クライアント	Positive	24.0** (46)	18.2 (16)
	Negative	9.0** (11)	15.6 (35)

*危険率 0.01

**危険率 0.05